

# 実習における学生の「ゆらぎ」についての一考察

——実習記録からみえる「ゆらぎ」——

志 村 祐 子

## 1 は じ め に

本研究は、ソーシャルワーク現場実習における体験を、いかに学生にソーシャルワークの援助技術に結びつけたものとして意識化させることができるかということで進められてきた。これまで、学生自身が自分の書いたソーシャルワーク現場実習記録を三次元モジュールの各項目により分析する方法が考案された。また、手作業による分析の時間的負担を軽減するとともに、分析した結果を実習中にグラフ化し、学生自身が自分の実習における学習内容・学習焦点・学習行動の傾向を把握し、その後の実習内容の検討に役立てられることを目指し、コンピューターソフト開発を行ってきた。この間の経緯については、これまで様々な機会に報告をしてきたものをご参照頂きたい（遠藤克子：1997<sup>1)</sup>、1998<sup>2)</sup>、1999<sup>3)</sup>；遠藤克子：1999<sup>4)</sup>；塩村公子：1999<sup>5)</sup>；小林巖：1999<sup>6)</sup>；遠藤清江：2001<sup>7)</sup>；遠藤克子：2002<sup>8)</sup>、2003<sup>9)</sup>；金正信：2006<sup>10)</sup>；志村祐子：2006<sup>11)</sup>；遠藤克子：2007<sup>12)</sup>；塩村：2007<sup>13)</sup>）。今年度は新たに「TRUSTIA」<sup>14)</sup>というコンピューターソフトを用いて学生の実習記録分析を行い、実習中における学生の学習内容・学習焦点・学習行動について学生がどのような言葉遣いを用いて表現しているかの把握を行い、実習の事後指導の授業においてどのような点を指導していく必要があるかについて検討することとした。筆者は、毎年学生の実習事後指導において、実習場面での困った場面について逐語記録で提出させている。そこには多くの学生が、利用者、職員との関係の中で対応に戸惑い、困った場面が記されている。本稿では、学生が実習現場においてどのようなときに迷い、不安を感じるかという点に焦点を当て、そうした場面を学生が実習記録においてどのように表現しているかについて考察する。

## 2 「ゆらぎ」について

社会福祉実践において、援助者は、利用者との関係の中で、自分の関わりが果たして妥当なのか、もっとよい解決法があるのではないかといった迷いをもつことがしばしばある。また、利用者から投げかけられる様々な心理社会的な問題、利用者自身の心理的・情緒的内面に直面して動揺したり、不安になることも少なくない。そうした援助者の心の葛藤としての「ゆらぎ」について検討する。尾崎<sup>15)</sup>は『「ゆらぐ」ことのできる力』において社会福祉実践における「ゆらぎ」は

実践の中で援助者、クライアント、家族などが動揺する、葛藤、不安、迷い、わからなさ、不安全感、挫折感などの総称であり、社会福祉実践は「ゆらぎ」に直面し、「ゆらぎ」を抱え、「ゆらぎ」という体験から何かを学ぶことによって、その専門性や技術を高めることができている。さらに「ゆらぎ」という経験こそが、社会福祉実践の原点であると述べている。「ゆらぎこと」は決してマイナスではなく、その経験をを超えてそこから何かを学ぶ機会になるという考え方が見て取れる。また、本著における文献レビューで、坪郷<sup>16)</sup>が、「ゆらぎ」は福祉国家を崩壊にさらすさまざまな危機状況を指し、「ゆらぎ」は葛藤、危機であると同時に、成長・発展の契機でもあるとする見方が存在するとし、平木<sup>17)</sup>は青年との臨床経験を通し、「ゆらぎ」は深刻な問題、危機であると同時に、成長、再生の契機と捉えているとしている。また、安藤<sup>18)</sup>は、現代家族が示すさまざまな危機現象を「ゆらぎ」と捉え、早急に解決を要する課題であると指摘し、さらに社会的な取り組みと学際的協力が不可欠と指摘しているとしている。牛島<sup>19)</sup>は精神科医の立場から、家族像と家族のゆらぎについて述べ行き先の見えない過渡期を象徴するものと捉え、細井<sup>20)</sup>は、産褥期の心的変化より、女性が母親に移行するプロセスにおける「ゆらぎ」について、危機として認識されると同時に、変容・発達を生み出す契機と捉えている。加藤<sup>21)</sup>は政治学と歴史学の立場から、近代国家のゆらぎをテーマに「ゆらぎ」を混乱、危機と捉えると同時に、再生の契機とみているとしている。また看護場面でのゆらぎについて、宮本<sup>22)</sup>が、看護実習場面での「きがかかり」「ゆらぎ」「つまずき」「ゆきづまり」「看護者の意図がすれ違って患者に伝わる」等の経験こそが学習を深めるチャンスであり、「ゆらぎ」を危機であると同時に、成長・変化を導く契機として位置づけているとしている。以上をふまえて尾崎は「ゆらぎ」を物事の基礎、システム、あるいは人の判断、感情などが動揺し、迷い、葛藤する事態であるとし、①「ゆらぎ」は、システムや判断、感情が動揺し葛藤する状態である ②「ゆらぎ」は、混乱、危機状態を意味する側面ももつ ③「ゆらぎ」は、多面的な見方、複雑な視野、新たな発見、システムや人の変化・成長を導く契機でもある と定義している。

一方、自然科学的に見た「ゆらぎ」について、武者<sup>23)</sup>は「ゆらぎがあることが生きている証」と言えとし、ゆらぎの研究を通し、ゆらぎという不規則な変動があるからこそ、自然界は調和がとれ、さまざまな大切な動きが、その役目を果たしているということがわかってきたと述べている<sup>24)</sup>。そして物理の世界において、予想できない状態としての「ランダムな状態」の部分がゆらぎであり、その中で、人に心地よさを感じさせるものとしての1/f ゆらぎについて以下のように述べている。

「1/f ゆらぎのfは、振動数、または周波数で、英語の frequency である。」<sup>25)</sup> また「1/f ゆらぎは非常に普遍的に見られる現象でものの集団の動き方の根本法則のようなものらしいということがわかってきた。」<sup>26)</sup> そうして、「風や水、太陽をはじめ万物はゆらいでいるし、人間の体そのものが、もともと1/f ゆらぎのリズムをもっている」<sup>27)</sup> としている。「1/f ゆらぎが快適な感覚を与えるのは、私たちの体のリズムと同じ性質を持ったゆらぎを外部から刺激として受け取ると『快適』と

感じるのではないか」<sup>28)</sup>としている。山本<sup>29)</sup>は、こうしたゆらぎ現象に関わるサイエンスとテクノロジーを束ねる言葉として「フラクチュオマティクス (fluctuomatics)」という言葉を用いた。そして、ゆらぎは、「人間生活に快適性や癒しをもたらしたり、ものごとの硬直化を防いだり、多様性をもたらすものとしてシステム設計に意図的に取り入れられる場合がある」としている<sup>30)</sup>。

「ゆらぎ」が自然界において万物に存在し、且つ人間自体がゆらいでいるものである中で、尾崎等の取り上げた社会福祉実践におけるゆらぎは、自分のもつゆらぎのリズムと波長の異なる事態が外部に起こり、刺激としてうけとった時に「不快」なもの、「違和感」として感ずることからもたらされると捉えることもできる。学生が社会福祉の実習において「ゆらぎ」として、どのようなことに不安を感じ、迷い、悩んでいるかを実習記録から読み取っていく。

### 3 研究の対象と方法

#### ① 対象

本学4年生の社会福祉現場実習及び精神保健福祉援助実習を概ね24日間行った学生(24日を越える実習を行ったものもいる)で、本研究により開発したソフトを元に学生が日々作成した実習記録である。実習記録は、学生が自ら実習中の体験を意識化し、言語化したものである。

#### ② 方法

TRUSTIAによる言語表現解析を用いて、学生の迷い、戸惑い、不安を表現している言語を抽出し、さらにそのことが書かれたいる記録の本文から具体的な場面を検討した。

### 4 対象の概要

本学2007年度社会福祉現場実習生6名(高齢者施設で実習)、精神保健福祉援助実習生1名(精神科単科病院で実習)。計7名 いずれも女子学生

### 5 分析の手順

実習生の記録をデータベース化し、用いられた言葉の傾向として単語(名詞・形容詞)の使用頻度、単語と形容詞の係り受けの頻度と傾向を抽出した。係り受けの分析種類として名詞句と形容詞句が評価分析、形容詞句と名詞句が感性分析、動詞句と名詞句が行動分析、名詞句と動詞句が現象分析となっている。その中から形容詞句と名詞句の感性分析を中心に、本論のテーマである「ゆらぎ」に関する部分をより詳細に取り出し、学生がどのような場面でゆらいでいるかを見た。

## 6 分析結果

### i. 単語としての頻度（頻度の多い上位3つを提示）

社会福祉現場実習生

【名詞句】 ① 利用者 ② 今日 ③ 職員

【形容詞句】 ① 大切だ ② 多い ③ ない

【動詞句】 ① する ② 考える ③ 感じる

精神保健福祉援助実習生

【名詞句】 ① 患者 ② 自分 ③ PSW

【形容詞句】 ① 必要だ ② 良い ③ ない

【動詞句】 ① する ② 考える ③ できる

### ii. 係り受け頻度

【名詞句－形容詞句】

社会福祉現場実習生

① コミュニケーション－難しい ② 期間－短い ③ 利用者－多い

精神保健福祉援助実習生

① 知識－正しい ② 支援－よい ③ 人－様々

【名詞句－動詞句】

社会福祉現場実習生

① コミュニケーション－とる ② コミュニケーション－図る ③ 話（お話）－する

精神保健福祉援助実習生

① 身－つける ② 地域－暮らす ③ 自分－いる

### iii. 傾向把握（形容詞句－名詞句：感性分析）

形容詞句として社会福祉現場実習生では① 大切 ② よい ③ 多い、社会福祉現場実習生では① よい ② 必要 ③ 大切が上位3つを占めていた。さらに、形容詞句の中から「ゆらぎ」に関すると思われるものから多いものを抽出した。

「難しい」

- ・利用者の真意を測ることは難しい
- ・グループで会話することは難しい
- ・利用者への声かけが難しい
- ・非言語コミュニケーションの難しさ、大切さ
- ・あまり言葉を発しない人とのコミュニケーションが難しい
- ・利用者の気持ちをくみ取ることの難しさ
- ・利用者の立場で考えることの難しさ

- ・個別性にあったコミュニケーションの難しさ

- ・ニーズの引き出しの難しさ

「不安」

- ・利用者の不安への対応が難しい

- ・利用者と関係を作れたか不安

- ・対応が不安

- ・どう声がけすればよいか不安

- ・状況が理解できない不安

「上手」

- ・緊張して上手く話せない

- ・話のきっかけが上手く作れないため上手く話せない

- ・コミュニケーションが上手くとれない

- ・相手の気持ちを上手く察せられない

- ・苦手な人と上手く関われない

「良い・悪い」

- ・介入の仕方が正しかったか

- ・対応が良かったか

- ・どのように接すればよいのだろう

さらに上記の場面を「難しい」「不安」「上手」「上手くない」を感性分析し、本文に沿って詳しく見た。

社会福祉現場実習生の名詞句・形容詞句の係り受けにおいて「コミュニケーションー難しい」が一番目にきており、また、名詞句・動詞句の係り受けでは、「コミュニケーションーとる」「コミュニケーションー図る」が1位、2位であった。3位も「(お)話ーする」が挙げられ、利用者との関係に学生の学習焦点が当たって居ることが伺える。そうした中で「難しい」としてもっとも多かったのが、「すぐに個別性にあったコミュニケーションをとること」であった。学生はその理由として、「利用者についての情報量の少なさ」「言語的コミュニケーションにばかり気をとられていた」等をあげていた。相手を十分に知らない中で、まず関わりを作る難しさに直面している学生の姿が見られる。

次が「あまり言葉を発しない利用者、言葉が理解しづらい利用者とのコミュニケーション」で「自然な流れで情報を引き出せない」こと等であった。やはりここでも言語的コミュニケーションばかりに気をとられ、上手く関われない戸惑い、もどかしさ、自信喪失している学生が居る。しかし、指導者からのスーパービジョンを受け、ペースをあわせること、その場において見ることの大切さ、まず声がけをしてみること等の非言語的コミュニケーションを含めた関わりが大切であ



ると自己覚知している。

「不安」として最も多かったのは、利用者自身の気持ちとしての不安（「辛い」「苦しい」「痛い」「悲しそうな様子」等）を訴えられた時、拒否的な態度、嫌悪感を向けられた時で、「どうしよう」「どう対応すればいい」と、相手の気持ちを理解する余裕がなくなった場面がある。これは精神保健福祉援助実習生においても挙げられていた。「自分の対応が良かったのか」「何も言えなかった」と、利用者の不安な気持ちに対応することが難しい、あるいは、そのことにより自分も不安になっている学生の姿が見られる。その他にも利用者の思いを受け止めること、価値観の違う人との関わりにおいて迷っている様子がある。言葉の裏を理解する難しさ、言葉に隠された気持ちの読み取りの難しさも挙げられ、できていない自分に対し不安を感じている。

また、指導者からの的確な指示がなくどう動けばよいかわからず戸惑ったこともあった。

声かけが上手くできない場合として、「どう思われるか」「今大丈夫か」「嫌がられていないか」等相手の気持ちに気遣いしすぎていることが多かった。そして、声かけできない自分に対し「情けない」「焦り」「周りの状況が見えなくなった」等があった。しかしその後、状況が見えてきて、慣れてくるに従い落ち着いて利用者と関わっている様子もある。初めて遭遇する場面との波長あわせに時間がかかる、沈黙に対し焦ったり、沈黙を恐れ「何か話さなくては」と焦ることから生じる不安と考えられる。精神保健福祉援助実習生においては、病識のない相手との対応、これまでに受診した経験のない方への受診を勧めるときの対応、断薬している方への対応、自分が関わることで病状が悪化したらという不安等医療面との関わりでの戸惑いが多かった。また、相手に対しわかりやすい言葉で伝えることの難しさ、理解できるように説明することの難しさが挙げられていた。

## 7 考 察

精神保健福祉援助実習（以下 PSW 実習）においては「PSW として」「ソーシャルワーカーは」といった単語が記録の中にたびたび登場するが、社会福祉現場実習（以下 SW 実習）の記録にはあまり見られない。「他職種との連携」といった内容も同様の傾向であった。精神科領域においてチーム医療が叫ばれ、現場において他職種との連携がかなり意識化されており、たびたびそうした場面を体験していることによるものと考えられる。社会福祉現場実習（以下 SW 実習）の高齢者施設においては、介護スタッフとの連携もかなりの頻度で行われているはずだが、学生が、現場実習において SW 実習としての意識が薄く、筆者が以前にまとめた論文<sup>31)</sup>における三次元モジュールでの分析で、実習行動として「介護」が圧倒的に多かったことから、介護行動に関わりの焦点が当たっており、介護スタッフとの専門職域の境界が曖昧に捉えられていると考えられる。

三次元モジュールにおけるこれまでの傾向として、実習対象に「利用者」が多かったことから

もわかるように、単語として両実習生とも「利用者」「患者」が最も多かった。そして、関わりとして「大切だ」「必要だ」と捉えていることが形容詞句の順位からわかる。

これまでの学生指導において、自分自身についてみつめることをあまりやっていない学生、自分を表現することが苦手な学生のイメージが筆者の中にあったが、内面的なものとしての学生のゆらいでいる様子が、実習記録に多くの「迷い、戸惑い、不安」として記述されていることが改めてわかった。生の現場に直面することで、それまで何気なく過ごしてきた自分、あるいは意図的に避けてきた自分と向き合うことが避けられなくなる、また求められ、ゆらぎを実感している様子が見られる。実習事後指導におけるスーパービジョンの必要性を改めて認識した。また、実習巡回指導の際の丁寧な記録の読み取りと、学生からの訴えに耳を傾け指導する大切さも再認識した。

福田が「実習教育は、『学生』『実習先』『学校』による教育カリキュラムである。」とし、「教員が学生と『向き合い』、じっくり学生の実習体験に耳を傾けることから出発し、三者関係の吟味を丁寧に行うこと。そしてそれを積み重ねていくことによって、山積みした課題の一つひとつを明らかにしていくことが必要」<sup>32)</sup>と述べているように、こうしたゆらぎは実習事後指導において十分に学生・教員間で検討していくことが大切で、そのことにより、学生が現場に出た際自分を十分に活用していくことができることにつながると考える。

「何より関わりを育てるのは、援助者とクライアントが互いに自らと相手に向き合う力である」<sup>33)</sup>ことから、援助者のゆらぎを伝えることでクライアントにゆらぐことを許容する。「互いにゆらぎ、ゆらぎが伝わりあうことによって、初めて信頼関係が生まれ」<sup>34)</sup>自分の中のゆらぎを認め活用することも大切なこととなる。また、相手の言動に振り回されることは他者からの評価が気になっていることで、自分の思い、対応に確信が持てないなど自己評価の低さ、自己肯定感が十分にもてていない、自信がない場合が考えられる。

## 8 ま と め

これまで見てきたような学生が実習において抱く「ゆらぎ」について、現場指導者からの適切なスーパービジョンにより、実習中に整理された場面があった。しかし、積み残された「ゆらぎ」に対し実習事後指導において教員がどのように指導していくことが望ましいか。

「知る」ということは能動的な事物の把握である<sup>35)</sup>。そして、「技能を必要とする活動である」「経験するということは事実をそのままに知ること」<sup>36)</sup>「実践とは、各人が身を以てする決断と選択をとおして、隠された現実の諸相を引き出すこと」「実践が理論の源泉」「経験の中でより能動的なもの、つまり特に意思的で、決断や選択をとまなうところのものが実践」「実践の中の特殊に媒介的なものが技術」<sup>37)</sup>とされている中で、学生が実践として体験の中から「知った」自分の心のゆれに対し、技能、技術を身につけることにより、自分自身で整理し、乗り越えていくことが求めら

れる。前述したようにゆらぐことは決してマイナスのものではない。誰もがもっているし、経験しているものであることをまず学生に知らせることにより、学生自身が実習中に自分に抱いたマイナスのイメージをとることが必要である。そうして、一つひとつの場面を吟味することで対応の仕方を身につけることが可能となる。そのためには、事例的な学び、ロールプレイ、ディスカッション等を用いて新たな認知を獲得していくことが必要となる。柳原は『『ゆらぎ』は、感情がしなる状態、つまり柔軟に揺れ動く状態』<sup>38)</sup>とし、「相手のゆらぎに波長を合わせる」<sup>39)</sup>ことが援助として必要となると述べている。我々教員も、学生のゆらぎに波長を合わせ事後指導における教員の学生に対するエンパワメントアプローチが、学生の自己肯定感の醸成に寄与するものと考ええる。

相手との関係が「上手くとれた」「信頼関係がもてた」と感じる時、我々は相手のゆらぎに波長が合っているのであろう。そうして感じる心地よさ、安心感の中に「1/f ゆらぎ」があるものと思われる。

コンピューターの台数の関係で、分析対象としての数は少なく、今回の分析を一般的な傾向として汎化することは困難であるが、これまでの実習生の記録も合わせることで、今後の実習生記録の積み重ねを行いさらに確認していきたいと考えている。

また、今回使用したパソコンソフト TRUSTIA については、筆者の未熟さ故十分に活用し切れているとは言い難い。今後、さらに活用を重ね、学生の指導に役立てていきたいと考えている。

本研究は、東北福祉大学感性研究所における文部科学省学術フロンティア推進事業(平成16年度～平成20年度)による私学助成を得て行われた。

## 引用文献

- 1) 遠藤克子, 塩村公子, 田中治和, 宮崎法子「特別養護老人ホームにおける社会福祉援助技術現場実習の方法に関する研究—学生への社会福祉援助技術の指導をめぐって—」社会福祉研究室報 7, 1997, 126-139
- 2) 遠藤克子, 塩村公子, 田中治和「特別養護老人ホームにおける社会福祉援助技術現場実習の方法に関する研究 (II) —『実習記録の整理と分析を中心に—』」社会福祉研究室報 8, 1998, 82-87
- 3) 遠藤克子, 塩村公子, 田中治和「特別養護老人ホームにおける社会福祉援助技術現場実習の方法に関する研究 (III) —『実習記録の整理と分析を中心に—』」社会福祉研究室報 9, 1999, 81-98
- 4) 遠藤克子「社会福祉援助技術現場実習報告」『社会福祉年報』20, 1999, 71-75
- 5) 塩村公子「社会福祉援助技術現場実習報告」『社会福祉年報』20, 1999, 7-43
- 6) 小林 巖「学生と教員のコミュニケーションにおけるパソコンソフト使用に関する研究」『社会福祉年報』20, 1999, 83-88
- 7) 遠藤清江「重症心身障害児施設における社会福祉援助技術現場実習の方法に関する研究—3次元モジュールを活用した社会福祉援助技術の指導について—」『東北福祉大学研究紀要』26, 2001, 97-113
- 8) 遠藤克子「社会福祉援助技術現場実習を効果的に展開するための実習記録の活用について」『社会福祉研究室報』12, 2002, 48-63



- 9) 遠藤克子「社会福祉援助技術現場実習を効果的に展開するための実習記録の活用について」『社会福祉研究室報』13, 2003, 108-125
- 10) 金正信「ソーシャルワーク教育におけるパソコン使用に関する研究その1—パソコンソフトの開発と研究（その1）」『東北福祉大学研究紀要』30, 2006, 73-82
- 11) 志村祐子「ソーシャルワーク教育におけるパソコン使用に関する研究その1—パソコンソフトの開発と研究（その2）」『東北福祉大学研究紀要』30, 2006, 83-95
- 12) 遠藤克子「三次元モジュール概念による社会服援助技術伝達について—“感じる”ことと“考える”こと—」『感性福祉研究所年報』7, 2007, 109-125
- 13) 塩村公子「『ソーシャルワーク現場実習三次元モジュール』の活用—体験学習を促進するツールとして—」『感性福祉研究所年報』7, 2007, 127-143
- 14) TRUSTIA は JUST SYSTEMS の開発したテキストマイニング・ツールによる評価分析システムソフト
- 15) 尾崎新「『ゆらぐ』ことのできる力—ゆらぎと社会福祉実践—」誠信書房, 1999, まえがき, ix
- 16) 前掲 12-13, 坪郷 實『新しい社会運動と緑の党—福祉国家のゆらぎの中で—』九州大学出版会, 1989
- 17) 前掲 13-14, 平木典子「家族のゆらぎと現代の青年たち」『現代家族の揺らぎを越えて』金子書房, 1990, 3, 12
- 18) 前掲 14-15, 安藤延男「現代家族のゆらぎを越えて—学際的アプローチに期待するもの—」『現代家族の揺らぎを越えて』金子書房, 1990, 13-18
- 19) 前掲 15-17, 牛島定信「現代家族のゆらぎと克服—精神医学の立場から—」『現代家族の揺らぎを越えて』金子書房, 1990, 31-47
- 20) 前掲 16-17, 細井啓子「母親になることへのゆらぎ」『現代家族の揺らぎを越えて』金子書房, 1990, 151-167
- 21) 前掲 17, 加藤 節「国民国家のゆらぎと政治学」第2章 岩波講座・社会科学の方法I『ゆらぎの中の社会科学』岩波書店, 1993 59-83
- 22) 前掲 18-19, 宮本真巳「看護場面でのゆらぎ」『看護場面の再構成』第2章 日本看護協会出版会, 1995
- 23) 武者利光『ゆらぎの発想—1/f ゆらぎの謎にせまる—』NHK 出版, 1994, 12
- 24) 前掲 19
- 25) 前掲 32
- 26) 前掲 37
- 27) 前掲 133
- 28) 前掲 142
- 29) 山本光璋「フラクチュオマティクス原論」山本光璋・鷹野致和編『ゆらぎの科学と技術—フラクチュオマティクス入門—』第1章, 東北大学出版会, 2004
- 30) 前掲 7
- 31) 志村祐子「ソーシャルワーク教育におけるパソコン使用に関する研究その1—パソコンソフトの開発と研究（その2）」『東北福祉大学研究紀要』30, 2006, 83-9
- 32) 尾崎新「『ゆらぐ』ことのできる力—ゆらぎと社会福祉実践—」第7章 219, 福田俊子, 「実習教育と『ゆらぎ』—学生と教員のスーパービジョン関係について考える—」誠信書房, 1999
- 33) 前掲 296
- 34) 前掲 141
- 35) 中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波新書, 1992, 38
- 36) 前掲 66-67
- 37) 前掲 71
- 38) 前掲 115

39) 前掲 125

### 参 考 文 献

武者利光『人が快・不快を感じる理由』KAWADE 夢新書, 1999

武者利光編『ゆらぎの科学 1』森北出版株式会社, 1991

尾崎 新編『「現場」のちから』誠信書房, 2002

鷺田清一『「待つ」ということ』角川選書 396, 2006

奥川幸子『身体知と言語』中央法規, 2007